

特集 1 学校を12345
A B “ 評価 ” する

それから、学校の役割として、子どもの社会化と個性化にどう対応するかということが課題です。社会化とは、子どもが社会に出ていくための基本的な能力や資質などで、それは教科の学力や生活習慣・態度なども含まれます。これまでの学校は、こうした子どもの社会化という面での役割を担ってきたわけです。しかし、一方で、子どもの個性を尊重して伸ばしていくということも、学校は要請されています。子ども一人ひとりが自尊感情を

もって生きていけるためにどのような手だてを打てるのか。それが求められているわけです。こうした社会化と個性化は二律背反のものではなく、それらを統合した形でカリキュラムを組んでいかなければならない(編注・三八ページ参照)。そこでの評価は、これまでの社会化の面からの評価とともに、子ども一人ひとりをよく見つけた教師の評価が求められる。つまり、一人ひとりの子どもについて、どれだけ文章化できるかということが教師による評価活動として大事になってくるわけです。そうした子どもに対する見とりがどれだけでできているかということが、教師の実践評価につながってくると思っんです。

まず、やはり目標とする学校づくりを明らかにすること。目標と評価は表裏一体ですから、目標がきちんと設定されていることが意味のある評価を行っていく条件です。次に評価は次の計画に生かされなければ意味がありません。Plan Do Seeのサイクルが次々につながっていくようなものでなければいけないわけです。そのため、目標に沿って目指すべき個々の課題や保護者・地域の願いなどを整理

なぜ今、学校評価か

学校というところはなかなか変わらないものです。社会が急激に変化している今においても、積極的に変えようとする学校は少ない。しかし、そこで問題なのは、社会の中にある学校の値打ちが下がってきているということ。例えば、以前は学校にだけピアノがあったけれど、今では学校にだけエアコンがない。そうしたことに象徴されるように、ハード面において学校は明らかに社会から遅れをとっています。しかし、問題はそれだけでなく、教師の学歴や地位、権威も同様に相対的な値打ちが下がってきているということ。保護者の学歴も高くなり、情報化も進んできて、学校をまるごと信頼して子どもを預けるという意識も低くなってきたし、授業の進め方をはじめ、いじめや学級崩壊などに対する学校の姿勢などをみる保護者・地域の目も厳しくなってきました。今や、教職員が思っているほど学校の信頼は高くないんです。つまり、ハード面だけでなく、ソフト面についても学校の値打ちが下がってきているのが現状なんです。

しかし、教育というものは学校と保護者の関係をはじめ様々な関係において信頼関係が

あつてはじめて成り立つものです。だからこそ、学校が積極的に信頼回復に努めることが、今強く求められてきているんですね。そのために、学校の教育活動をはじめ、さまざまな面から点検をし、評価をしていくことが必要になってきているわけです。つまり、保護者や地域に学校のありようをきちんと説明できる材料として、学校評価が求められるように

なっているということなんです。 **何を評価対象にすべきか** まず、子どもが元気にいきいきと、そして頑張っている姿を学校につくらなくてはなりません。そのために教師がどれだけ努力したか、それが学校評価の根本になるのではないのでしょうか。学校が保護者や地域に信頼さ

インタビュー

学校評価で信頼とれる学校づくりを

園田女子学園大学教授・子ども教育広場代表

野口克海さん



学校のアカウンタビリティが問われて久しい。「生きる力」、学力、いじめや学級崩壊。学校はその取り組みや課題を明らかにし、結果責任も問われる時代に入ってきているようだ。そうした中、小・中学校設置基準の制定をはじめ、積極的な学校評価を促す動きも出てきた。学校は何のためにどのような評価に取り組んでいくべきか。学校現場、教育行政など様々な立場から学校改革を提言してきた野口克海氏に聞いた。